

『銀河鉄道の夜』から （１）パルバースによる解説

藤原 道夫

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は、ずいぶん前に読んだはずだがすっかり忘れてしまった。ふと、この童話をまた読んでみたくなった。たまたま本屋の棚にある解説書が目についたので求め、本文の文庫本も入手した。童話とはいえ、銀河鉄道のところは容易に読めないので解説書は大変参考になる。銀河鉄道の路線図が載っているのも有難い。

解説書の著者はロジャー・パルバース、来歴をテキストから読み取ると以下のよう。

1944 年ニューヨーク生まれでオーストラリア国籍、自らユダヤ人と明記している。UCLA とハーバード大で学び、ワルシャワとパリに留学した後、1967 年初めて日本を訪れた。その後演出活動や執筆などに携わっているよう。

来日した時、ある大学教授に「日本の作家のなかで一番美しい日本語を書いているのは誰ですか」と尋ねたところ「宮沢賢治だ」と教えられたとか。そこで一つの短編に取り組んだところ、とても難解だったが体験したことのない世界に引き込まれてしまう。賢治の故郷花巻を訪ね、弟の清六さん（『兄のトランク』の著者）に会ってその人柄に魅せられ、ますます賢治の世界にとりつかれていく。そして『銀河鉄道の夜』を英訳する、しかも４度にわたって。この作品の中に「21 世紀に生きる世界中のすべての人々にむけてのメッセージが隠されているような気がする」という。生と死、そして幸せがテーマになっているからだろう。

賢治の文には独特の言い回しや擬音語が多く使われ、文章として読みやすくはない。これは編集者の介入がなかったことにもよる、それだからこそ賢治独特の文体が残った、とパルバースは指摘する。英訳に難渋しただろうが、彼はしっかりした日本語で解説している。

解説書は有用だ、しかし賢治独特の感覚的表現は自ら感じ取るのが肝要だ。私が少年期を過ごした西会津の山村から銀河がよく見えた。空がきれいだったし、眼もよかったのだ。その時に戻った気持ちになり『銀河鉄道の夜』を読んでいこう。